特集1

「厳しい現場に根差しつつ世界最先端の経済理論を創造する ー植田和弘教授の研究教育活動から学んだこと」

池　上　　惇（京都大学名誉教授）

高いところから失礼致します．私は，大学に講座というものが当時はございまして，財政学関係講座の担当教授をやっておりました，池上惇と申します．

植田和弘先生には，お若いころ，この京都大学経済学研究科に御着任いただき，心より感謝いたしております．本当にありがとうございました．おかげさまで，京都大学も，経済学研究科，経済学部も，すべて，本当によくなりました．

実は，先生が来られる前は，自由で豊かな雰囲気を求めつつ，なかなか，そうはゆかない雰囲気でした．

何しろ，当時は，予算が貧弱で，経済学研究科の各研究室そのものも貧しくて，当時，植田先生の博士論文をご指導いただいたと聞いておりましたので，元工学部の著名な先生に，御業績のご評価など，お伺いしておりましたら，「経済学研究科は，よく知らないから，いっぺん研究室を見せてもらいたい」とのご趣旨で，私の研究室においでになりました．

第一声は，「なんという貧弱な研究室ですか．これで何人指導しておられるのですか」という意味のことを指摘されまして，申し訳ないのですが，経済学部はこういう状態でございましてと申し上げましたら，「分かりました，それじゃあ」ということで，ほっとしました．

後日，植田和弘先生に経済学研究科・経済学部に御着任いただくことになってのですが，まさに，冷や汗ものでございました．

先ほども，池上の指導で博士課程に進まれました方々から，お話がございましたが，私自身は，当時としましては，有難いことに，多くの優れた大学院生に恵まれておりまして，財政学関係講座，助教授を教授会でご審議いただく際には，人材推薦を依頼されれば，豊富な人材が揃っていたと思われていました．

しかし，私は，ご推薦する場合には，この研究科で養成した人材だけでなく，ひろく，内外から，国際的にも通用する人材を探したうえで，総合的に判断しようと，心に決めておりました．その理由の一つは，やはり，京大というところは，相当，厳しいところですから，長期的に考えますと，財政学の次世代を担う人材は，それに耐えて，さらに，より大きな発展を実現してゆかねばならない，という考えでした．

御着任後，私が何よりも植田和弘さんに期待しておりましたことは，経済学研究科・学部にせよ，学術界にせよ，そういう世界は世

間が考えるほど静謐な世界ではない，ということです．戦後，有名な教授総退陣なども，歴史に残っていますし，大学紛争の頃は，多くの教授が死去され，また，退任されています．

この世界は，本当に厳しいところでございまして，いつ何時，場合によっては，正論を貫き，大学の自治や学問を守るために，辞表を出さなくてはならないかもしれない．

そのときに，ちゃんとした文献が書けて，著作権料を手にし，たとえジャーナリストになったとしても見事に飯の食っていける人．これが，私が，もしも，人材を推薦してもよいと言われたならば，第一の条件であります．やはり自立して，研究者として飯の食える人．これは非常に大事なことだと思います．実は，大学院進学を希望する人々に私は，いつも，この条件を提示していたのですが，極めて評判が悪かったのを覚えています．

もう一つの条件ですが，私の大学院時代の指導教授，豊崎稔先生から御示唆をいただきました．豊崎先生は，私を財政学講座に関係する研究をしていた人物として，ご担当の教授に推薦された方です．

そのとき，私を呼ばれまして，「君な，君の専門に関わるところで，人材探しで，困っている方がいる．応募してみる気はないか」と，こんな調子でした．

そして，そのときにおっしゃいましたのは，「もしも，将来，そういう講座の責任を持ったならば，そこで勉強する全ての研究者，全ての学生に責任を持ちたまえ」．さらに，「自分の研究水準や教育水準を超える人材を育てたまえ．」とおっしゃいました．

これにはこたえました．

オーバードクターが，いっぱい出ている時代でございましたし，卒業生も就職してからでも苦労している．というのに，まだ，一人前の業績も上げていない人間に向かって，「自分を超える人材を育てよ」とは．

よくそんなことを言うな，とも思ったのですが，若い頃ですから，精いっぱいの負けん気を出しまして，「分かりました」と申し上げました．

不思議なもので，人材を探す姿勢でおりました時に，豊崎先生のお言葉は，絶えず，蘇っておりました．

そう言われたからには，そういう人を探さなくてはしようがありませんので，一生懸命探して，植田和弘君なら大丈夫だと．確信しました．

まず，人柄が違います．全然違います．平穏に大学生活を送ってきた，普通の研究者ではないのです．若いのにも関わらず，公害による健康被害の現実を直視し，非常に温かに，解決の道を探し，ともに，学ぶ人々に対して，尊敬の念を持ち，学びあって，利己心なく，一人一人を自分を超えるような水準にまで高め合おうと思っている人でした．

これは，もうお会いして，話をして，すぐに分かりました．

何しろ若いころは「イタイイタイ病」のことで，ずいぶんと苦労され，胸まで水に漬かって調査していたらしい．彼の見ている先は，カドミウムを垂れ流した当の責任者，それが彼の頭に絶えずあったんです．公害被害に苦しむ人々への温かな眼差し，そして，冷静に，科学的に，原因を解明しようとする態度．

私は，その彼の姿勢を見て，この人はすごい研究者になるなと思いました．私共が研究

者になったころ，杉本栄一先生が『近代経済学の解明』理論社，1950年の序で，A．マーシャルの教授就任演説を引かれています．諸君は「経世家（statesman）」たれ．それは，「冷やかな頭脳と温かい心情（cool heads but warm hearts）をもって，自己の周囲の社会的苦悩と闘わんがために自己の最善の力を捧げ，また，教養ある高尚な生活のための物質的手段をすべての人に与えるのは，いかなる程度まで可能であるかを明らかにしようと，自己の全能力をつくすひとびと」（同上，19ページ）であると．この言葉も思い出しておりました．

経済学研究科・経済学部に，植田和弘先生に来ていただいて，今日の日まで，大学院学生，学生，市民，同僚，大学管理組織などなど，本当に，ずいぶん，ご苦労をおかけしました．私も学会づくりは励んだ方ですが，それをはるかに超える超人的なご努力で，研究も，教育も，学会も，社会的な責任を果たす活動も，見事に，達成されました．

多くの研究会や学術組織を成功に導き，国際的な業績も，多数に上ります．日本代表する経済学者に成長されました．心底より敬意を表しております．

財政学講座が引き継いできた『財政と公共政策』も高い水準のものとされ，無数の信頼できるネットワークつくっていただきましたし，大学院生や学生たち，社会人，市民などなど，本当によく面倒を見ていただいて，卒業生たちをよく支えていただきました．

そうはいっても，もちろんいまどきなので，オーバードクターや，大学への就職は最も厳しい時代．苦労された方もあろうかと存じます．しかし，私も引き続き努力いたしますので，どうか勘弁していただきたい．この問題の解決には「社会人大学院づくり」を全国ネットで組織する必要があり，私と植田さんは，協力し合って，10年この方，頑張ってきました．何とか，達成しますので，しばし，御見守りを．

彼は，本当の意味でわが身を捨ててでも，皆さんからのご要望があれば，さまざまな場に自ら出掛けて，市民とともに皆さま方の教育研究の場をつくっていたと思います．

実は，そういう中でこそ研究者は育ちます．研究者というものは，一方では現場に足があって，他方では，その現場に行くということは，時間を取られますから大変なことです．もちろん経済的にもさまざまな配慮をしなくてはなりません．

その際に，疲れ切って，その乏しい時間に，現場を思い浮かべながら，家族にも迷惑の掛からぬよう配慮しつつ，どれだけの文献を読み，どれだけの学術的成果を吸収するか．とくに，理論史や思想史から学ぶべき内容を発見してゆくのか．その勝負みたいなものですよね．真剣勝負であります．これは，もう，この「二刀流」でいかないと学者は務まりません．

ですから，植田さんは，その「二刀流」を見事にやってのけましたが，最後に，残念でした．本当に過労だったんだろうと思うんです．定年近くになってからでも，何か集会があったら必ず行っていましたし，ちょっと勉強不足の人があったら，ちょっと頼んだら，すぐに呼び出してちゃんと指導してくれました．そういう意味では，えらいことをしたと．ついつい甘えて，いろんなことをお願いして，

本当に大変なことをしたと思って，深く反省しております．

彼が生み出した成果というものは，日本の学術界においても画期的なものでございました．いままでの量産型の大規模な生産システムと，それと結び付いた金融的な経済に対して，それを制御する主体というものを視野に入れて経済と財政を考えたというのは，彼の学位論文にも表明されておりますように，制御主体というものがどのようにして育つのかということと，政策としてそれを実行していくこととの間に，彼は見事に橋を架けて，科学的に，巨悪を解明し，巨悪を克服する道をも切り開いた．まさに，命を懸けて科学研究を武器に闘ってくれたし，今後も，闘い続けられると思っております．

その意味では，この日本というのは，原発事故で明らかになったように，必要な情報を出さないで，営利や権力のための独走を許す，巨悪に満ちた恐ろしい国でもございます．皆さま，よくご承知のとおりです．しかし，その中において法制度をつくり，裁判に勝ち，優れた行政人を生み出して，市民とともに，そこで一歩一歩，新たな市民の人生を拓く．あるいは，築いていくということは，とんでもなく難しく，希望も実績もあるが，同時に，苦難連続の道です．

私共の共通の先覚，宮本憲一先生は，本当に，そのことを実践され，理論化されました．

そして，まさに，身をもって実践されました．私どもは共に，それを見て育ち，こういう人が世の中にいるのだと思いつつ，常に励まされて勉強してまいりました．先生の御業績が日本学士院賞に推薦された時，これは，私共にとって，大きな歓びでした．

これからも多くの人々が植田さんの研究業績を基礎にして，それを乗り越えてゆかれると思います．ご指摘のとおり，植田さんは，社会金属学は経済学に対する素晴らしい問題提起をされました．資源のリサイクルの視点を入れて経済学を見ようとされたわけです．ある意味では，市場経済や非営利経済ということにこだわって経済を見てきた，われわれに対して，根底からの問題提起だったと思っております．

そして，それを私どもは受け止めて，皆さん方とともに新しい分野を次々と開くことができました．本日の成果をお伺いして，心からうれしく思います．

多くの方が現場を歩かれて検証しながらやっておられるというのを．

本当につぶさに足を運んで研究しておられるということを，身をもって感じました．

ありがとうございます．

そういう姿勢こそが，いわば巨悪を科学と実践で克服する第一歩でございます．民衆の生活の中にはコミュニティーがございまして，そこには，いかなる圧政があり，苦しみがあり，財政危機があろうとも，必ずそこには自治の力があります．経営や教育の力も，経済力もあります．

植田君は，そのことを，市民のコミュニケーション力量として高く評価されておりました．どんなことがあっても人々は議論する中で育つのだというわけです．技術だけで世の中が進むかわけではないのです．

もう一つは，教育力があります．コミュニティに行かれたら分かりますが，地域の教育力とはすごいものです．これは，多くの地域

に共通しております．日本の場合は特にそうです．世界的には，スイスのコミュニティが，しっかりしており，永世中立を推進するだけあって，しっかりしています．今，大国よりも小国に学ぶ時代ではないでしょうか．

もう一つは，コミュニティの経済力です．この経済力を，明治維新以来，日本は奪い去る，そして全ての経済力が中央権力に集中する政策を取ってまいりました．寄付行為一つでも天皇・皇族以外は厳しく制限してきました．それでも，渋沢栄一など二宮尊徳の思想を継承した人々は，寄付を集め，仕事を起こし，私学をつくり，一橋大学をはじめ，多くの学術の世界を育ててきました．地域にあった個の制度は，建前としては，解体されましたが，人々の生活や仕事の中に生きて，今日を迎えております..

その再生，レジリエンスの過程では，多くの地域で経済力を持ったコミュニティができ始めています．これは大きな希望でありますし，いかに圧迫されても日本の農業が滅びないし，再生可能エネルギーが市民によって開発され続けるのは，そのためです．

ですから，地域を調査されましたら，どのように地域の篤農家たちが農業ともう一つの専門職，教師や医師，公務員，森林管理者，馬事専門家，企業人などなど，を身につけ，自分たちの職人能力と経済力で地域を守っているのか，そのことを深く研究して頂きたい．

そこには，いわば巨大な金融経済にはない新しい経済が生まれているということを，どうか発見してやっていただきたいと思います．植田君は，そういう現場をよく知っておられました．そして，その力に確信を持っておられました．

どうか皆さま方も，そういう地域に，いまのはやり言葉で言うとレジリエンスですが，いかに圧迫されても，たとえ強制収容所の中においても，人間は育つのです．まさに日本社会そのものです．

ですから，どうかそういう地域社会の現実をとくと考察していただいて，そこに確信を持って，これからも研究活動を続けていただき，どうか，皆様方の科学的研究を通じて巨悪を見事に制御して人々に自由と繁栄を再生する活動を継続して発展させていただきたいと存じます．

そのときに皆さま方の，産業・エネルギーや財政の御研究，例えば，技術，統計，簿記に関する知見，情報公開に関する知見，あるいは皆さま方が今日発表されましたように，さまざまに現在の経済を数量で推論しながら予測する力量．こういったものが非常に大きな力を発揮致します．これは新しい経済学が日本において定着した証拠でございます．

どうか皆さま方，そういう皆さま方のご実績に確信を持たれまして，今後ともどうかよろしくお願い申し上げます．

植田さんも，きっとそのうちにまたお元気になられる．あるいは奥さまがついておられますので，私は全然安心していまして，われわれも彼の声となります．彼は，まだ耳は聞こえるようでありますので，声が一番大変だと思っております．

声というのは，やっぱり人は代わることができるのだから，どうか皆さま方，声は必要に応じて代わってやっていただいて，この世の中に植田和弘の確固とした科学，経済学，あるいは経営学というものが確立されていて，これを手掛かりにすれば，巨悪は必ず制

御できるという確信を持って，どうか皆さま方が声となって，この研究成果というものを社会に定着させ，蓄積し，次世代に伝えてやっていただきたいと存じます．

ありがとうございました．